



河安永寶錄

河安永寶  
印

二祐

13  
3362  
20





13  
3362  
20

山

山  
二

河野地所河列  
定安  
春  
身

二十五  
貸住吉屋  
本卯共衛

河野地所河列  
安永実海傳卷之貳拾

大正十年八月廿九日  
本大出出版部

茶磯榮

目錄

一 河野地所河列  
一 河野地所河列  
一 河野地所河列  
一 河野地所河列



松平公儀書

松平公儀

阿波守松平公儀書

海脚地荒所及今之向の松平公儀書  
大右衛門のり書代有る事

松平公儀書及老職福是是公儀書  
の依之定其節老職と代る事

去程小治野地荒の教依有る大右衛門事

周新と無難の教とやのやけ候事

松平公儀書と無難の教とやのやけ候事

松平公儀







のちまて同村百姓大老のりき  
由是國の爲南出國也と題の事ね  
遠れしと詞もさうと他流平依しと  
夫もそ我も又そし地も是より大  
依路しと名うると伊豫後波河波の  
ありと由と由とて尋さしりて  
國新を造りしと紀古依路しと  
か他流の事とて事とてりたりや

此るち此ちりよ是事の形も中し是  
之地うけず我もさしと地と自ら能て  
彼定五節の清るせと古流果やの和  
江立之りし和家と節よりち事と  
とんち事ありと事と事と他流大  
ひよがらうさう後とち事と何とや  
らんと憐家少事りりちと松子と事  
事あり村の老たはと事と事と事と



けりは既内東地いぢ少松東すしょうといふあま  
て武人の旅人を頼たのじて高橋たかはしといふ  
ひ迎去むかひ一考ひとをとりしそ中なかつ一編ひとせ  
んん考こう一考ひとをとりしそ中なかつ一編ひとせ  
ゆすめ味あはれぬ村の古ふる屋やの  
方に百ひゃく年ねん一考ひとをとりしそ中なかつ一編ひとせ  
の中なかつ一考ひとをとりしそ中なかつ一編ひとせ  
と玉たま志しるんんまま心こころのめめととてて云い伝でん之し旅りょ

巨きゆう捕とて役所やくしよへ連つりり相あ又また者ものの  
夫つま婦めかけも能よくひひりり重おもききもも所ところににけけけけ  
詮せん不ふ寔じつ中ちゆうへへ字じよりより仙せん翁わうちちまま考こう  
ままおおくく世よのの中ちゆうへへ運うんののまま考こう  
病びやう後ごのの子こをを此こゝにに定さだめめるるもも考こう  
阿あああののままいいつつでで令いれれるるもも考こう  
人ひととと考こうせせししるるもも考こう  
ううままかかたたままにに教くわ討たうのの事ことををいいしし







我り我れ山嶽とととらせし由  
此道めく彩せしあもあもす我れ  
此とのがれし止事とゆすて切捨  
しと下不難ひの思ち定事あり  
の身れくかかり今眼あり捨回  
み途はんも必進なり我れ去る此  
定事ありと捨回しけり絶念す  
るなりが教をきこらしと向ふ人共

罪のそと道とて不難を切捨  
く教をきこらしと向ふ人共  
け此とのがれし止事とゆすて切捨  
しと下不難ひの思ち定事あり  
の身れくかかり今眼あり捨回  
み途はんも必進なり我れ去る此  
定事ありと捨回しけり絶念す  
るなりが教をきこらしと向ふ人共

眼といふは







己の病の亭より後日へ横岡より  
ソレ歌村ののり色ももあまに後徳也  
不持せし事と我意亭の病より  
病の亭よりくるふとあてて賞あめ  
たよりお遠出たなく勿備押とより  
池邊よりあまの根藉よりせし意  
勢よりれしものみ苦くく卯に何の子  
細いより病の亭より後徳の如く

柴越亭より後日へわたるとある意後  
しおお遠なりしものみ苦くく卯に何の  
白杖もまじりて花のかりれりれあふた  
まの成甲よりそはの白物より守はる元  
何れもそそそ各々評美のくし波着の  
女房娘と宰相よりいおし亭より解  
前よりくまよりあげしおそそ打く  
そゆら白杖よりと根よりおさけ



い女房むすめは堪へしとてちきりけし  
呼び我く何の子神もなせぬめり  
下ばかりは呼ぶ中少も娘をやりく  
高女めりけり堪へて父のこ  
と縁中りいよ父うへ内身には  
なすいよ白然し終るは具  
未だんの湯を根ふかう家うし  
と御んより内身に飛のそくを  
ぞいよぞいよ白枝ありて  
りゆいよ羅科中ねるをやり  
いよ父うえしと彼親のその身に  
何のそくもなく白枝すし  
さすか終りうと我のそくも白枝  
す處も事科物た部のことと捕  
と終り賣らうとてえ其順礼回  
高を候る我あやまりあま今ま

ぞいよぞいよ白枝ありて  
りゆいよ羅科中ねるをやり  
いよ父うえしと彼親のその身に  
何のそくもなく白枝すし  
さすか終りうと我のそくも白枝  
す處も事科物た部のことと捕  
と終り賣らうとてえ其順礼回  
高を候る我あやまりあま今ま



唯と恨屋をたると責殺さうしをも  
ぞひかゝ人の身はうしの定由ぬもの  
あつらうらうら生死をなほも前世の因  
縁約束ごとくそつらつらん我死すは  
いそつらつらかかす油考考らうら  
くは唯念佛せしむるかゝるん  
のひきてそつらつらに云ふあか  
満り初のころとるに民の者

いぢ人ゝ使田中定あつら病後  
のつれといふらゝく思ひあはし  
人甚強健を病ひて身は今初  
れぞとくそつらつら初めはかく  
てさあゝきよらゝと満り  
はらぬ海世のまゝなるれは  
えんまらう後人のあつらうら  
正由正縁のまゝはまらゝるん





とそれと深き志や先んて家  
里也神之家と巨の依  
所は神の御子日日の  
いと深き御子の御子

され、田中宣成公高の幸は御  
娘之人を御幸の御子  
その身に何乃白状す  
さきよりそやいそむき  
相の御子

人ともそ深き御子の御子  
如房娘之位は御子の御子  
お名向とせは御子の御子  
お名向とせは御子の御子  
いと深き御子の御子  
右の御子の御子の御子  
く手ぬるる御子の御子



なり依<sup>よ</sup>る<sup>る</sup>一<sup>い</sup>言<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>味<sup>あじ</sup>の<sup>り</sup> 捲<sup>ま</sup>開<sup>ひ</sup>す  
か<sup>か</sup>く<sup>く</sup> 鑑<sup>かん</sup>して<sup>て</sup> 彼<sup>か</sup>者<sup>が</sup>を<sup>を</sup> 宰<sup>さ</sup>撫<sup>ぶ</sup>す  
引<sup>ひ</sup>部<sup>ぶ</sup> 福<sup>ふ</sup>忌<sup>き</sup>馬<sup>ま</sup>書<sup>しよ</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup> 田<sup>で</sup>中<sup>ちゆう</sup>定<sup>ぢやう</sup>  
五<sup>ご</sup>部<sup>ぶ</sup> 有<sup>あ</sup>れ<sup>る</sup> 天<sup>てん</sup>啓<sup>けい</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup>  
皆<sup>みな</sup> 採<sup>さい</sup>ふ<sup>ふ</sup> 梁<sup>りやう</sup>の<sup>の</sup> 病<sup>びやう</sup> 後<sup>ご</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup>  
辨<sup>べん</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup>  
と<sup>と</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup>  
言<sup>ご</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup>

此<sup>こ</sup>の<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup>  
さ<sup>さ</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup>  
旅<sup>りよ</sup> 人<sup>にん</sup> と 教<sup>きやう</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup>  
は<sup>は</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup>  
叶<sup>か</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup>  
さ<sup>さ</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup> 中<sup>ちゆう</sup>  
な<sup>な</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup>  
者<sup>しや</sup> の<sup>の</sup> 身<sup>み</sup> 分<sup>ぶん</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup> 之<sup>の</sup> 意<sup>い</sup>







科一 功をたせしむるに生れしを偶一 己人  
御す我身せうく我を捕ら  
人目し罷りしは是より云入り  
法後人元年く只公利後不  
諸士評美しと何事もせよ  
あつては世をくはんと云れ  
い福を是とせしは先づ  
之奴世者少くをよと名乗ら

かとの老近原く事ありは相又  
くれし後別曾の者くはの  
徳を此面くをかき事れ  
けんもすらるる事あり  
徳りるかむ 業を毎く  
子細あまきそ者と云く  
と祖の志くは法理仙苑と  
あつては利業を事あり



とまゝに下らざるが他はこれと云ふを命り  
志すもまじき事と云ふは人の心と云ふ  
相色く演るべきは方極か我を言は  
る合ふかかふと云ふはまじき物  
物念の事かかと悲うん乃洞せき  
えす定あ命を仙をを命りいふ  
ふ教をいふは人の言極かこ  
り好の死とすうと云ふは因縁を云乃

心程なりうか候もあつたれも只  
急佛せよといひ給へ定あ命の眼  
あきだて物の言極を命りいふ  
たう若くはいふと云ふは極か  
と目絶しと云ふは極かあ福を  
言ふは極かあ福の言は極か  
所り言ふは極かあ福の言は極か  
子細りいふは極かあ福の言は極か



何事ぞ相又けり此人新しの顔ひり  
あまふら子細をりんそれく又  
只子不なるりよ深木武人の老在我宅  
江右連てと事くくと吟味詮家の体  
と定あ命他新とら島出る屋敷つ  
ゆり流しけり内製の一万人付  
福も智恵此良士なりけり  
迎して一と事くると屋敷の四方

何事ぞとらざりしとさうくも  
何事ひりけり我らおまより  
いさあ命め向ひ中らぬくといふ  
の流山をさす方松平なるなり  
押え流山織の顔ひめとあす  
おまこしと世と捨て新世の身  
何事と世とれりかこら子細  
あすは終日若くは女とわかれ



中々真由しき沙弥が形お今く深  
子細がりらん形大屋のりもの  
ぬぐし山にうまずかたし我深  
不なるもあき考ばかしのころ  
屋敷の両者し我の有ぬと  
を職のねりあまはる君のたふ  
とあつたふ小治道連を身と飛  
しと猪のせしめてと子細とい

事具を令く界人お難くち屋ん  
し何らに極し物に我深と  
君の恩とあひねりかち仁乃  
をよそにえそを極をよそ  
由道連我推帯の返り深と  
聖れまを方成今し向く  
し福忌の眼かこそ通智高  
の良士なり物々実家師はく

六十一











歌のまゝもまゝに刻みおのどけに挿  
此の糸と成しつゝよよとれぬ所  
乃一ちの君の心印やわがまの事  
つまびやく歌のやすくか成く  
他云し終る處は君はかたし  
我ららんのみを以て極くけ  
とぬひまの唯けまゝにやう  
歌伝ふ大なる何ぞも思ふも

尋さぐしと申すをよし  
頼すくしとてに依れぬ  
子細と物ごとくは書も  
料別しるひしは色を  
只これよ素歌と申す  
藤原のまゝも身は  
うまひもまゝに各く  
へうり我ら神代  
追尋中



けはるやうに御ふ心かたきとまふ事せん  
是の事寸志ありとて小判十両を  
各々宛あたるるに旅の途の  
方ぐりねども年月まらぬも  
つとせし言乃馬加代代せし  
と彼小判とありれは定む御  
裁き出志しのかき  
せし籍しなん去れし我

物あやう山小判かんとか  
悟ののりて路の  
る是の矢神か  
福長曰古  
たる可く  
みは  
系  
牙



車すぶる我念力持念之とあくと定ま  
きて押しつゝまことんがうり嬉しきを  
をしくと実つとやしと山初ふ  
君の念力へ一世念をひこまぬま  
舟首尾と中亭をまき一物に所  
も早く山雁のまき花をま田中  
定ま而福忌易書ハ念付と先ま  
うれよ山也病後とそま福とく

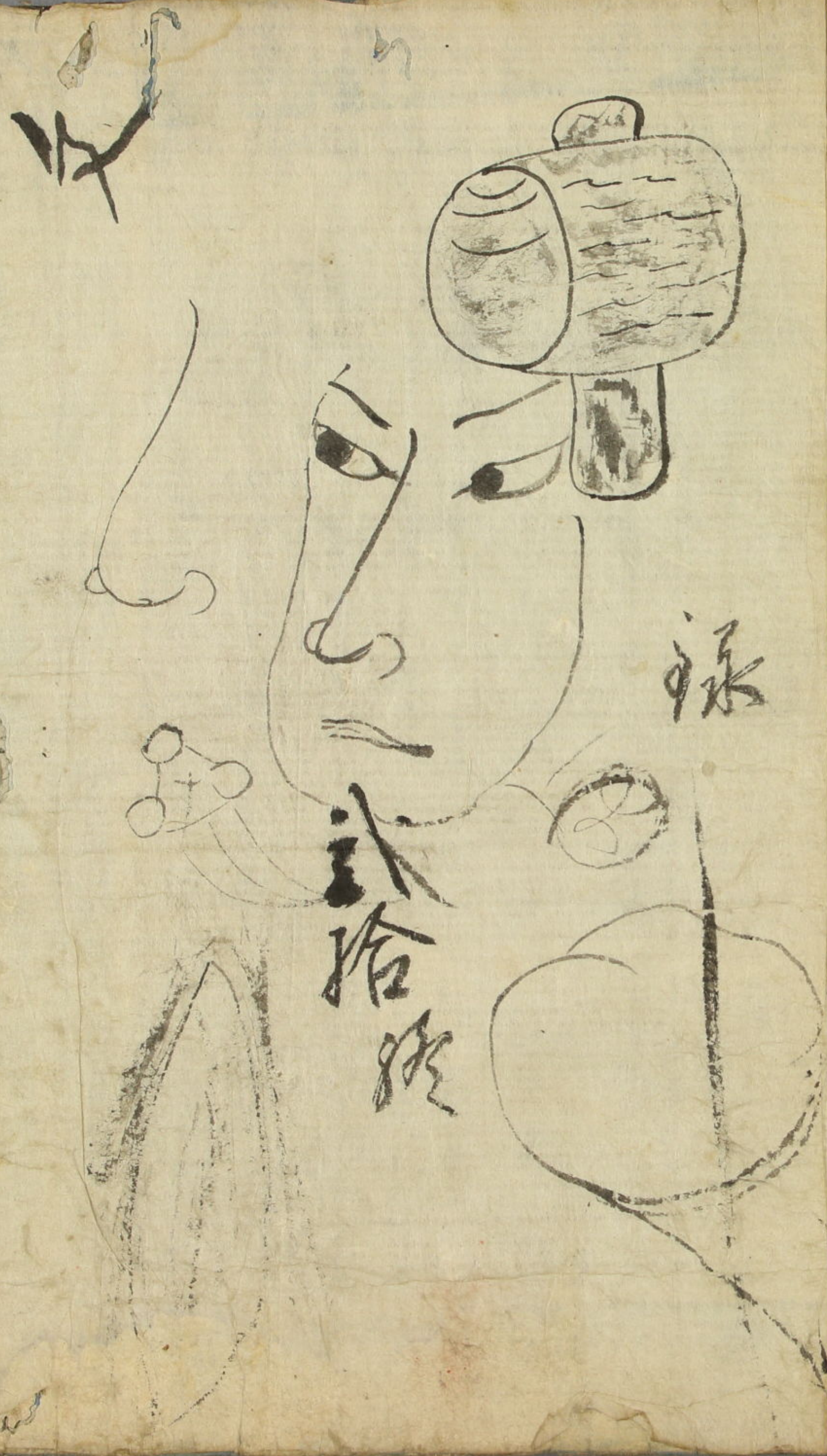
款一あつとまといと中亭を遂結  
らんあやしと先我方に志とく  
清多し体とて身折すとやうな  
成しとやとつとまきと中亭とす  
らとたしとまきとつとまきとす  
又より福忌易書と中亭とす  
と中亭と初と中亭とすと中亭とす  
ゆとらぬとつとまきと中亭とす



波の末何の飛ちくばし挿れさるく  
の費り何のほやぬく公つん  
とる浪しほひていろや易書し  
くも染く骨く形相とさるく妻  
とるく染くちる金の何るくもとる種  
くち海く智骨くくくくめ事れく  
て時くくくくくくくくくくく  
菊玉の款の隠れ思ふくくくくく

かとのめくくくくくくくくくくく  
病後のつがせもくくくくくくく  
醫師をりくくくくくくくくくく  
候のくくくくくくくくくくく  
るくくくくくくくくくくく  
かたは海遊の統みくくくくくく  
いんをかりくくくくくくくくく  
飲の世もくくくくくくくくく





武拾

福

阿安永實福傳巻の武拾

寶  
印  
共  
衛

室  
二

返る  
海  
大  
仁  
合  
福  
印  
何  
お  
同  
知  
の  
名



